

北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究（その3） ——石川県における農家住宅に関する研究—— （梗概）

玉置 伸悟

はじめに

本研究は昨年及び一昨年度に続くもので、本年度は北陸地方のうち石川県を対象としている。研究の目的は本質的には昨年度までと同様であるが、石川県を対象とする本報においては特に以下の3点に重点を置いている。

1 石川県農家住宅の分類と系統化、型分類の相互関係、発展過程を明らかにする。この型分類に関しては昭和48年度における石川県教育委員会（研究主査、奈良国立文化財研究所・伊藤延男）による民家緊急調査報告書「石川県の民家」を基礎としているが、同報告書は古民家の緊急保存、記録に重点があり、系統的、学問的究明という点からは残された課題も多い。本研究ではその間隙を埋めることによって、石川県における農家住宅を体系的に捉えることを目的としている。

2 緊急調査報告では、農家住宅の発展過程について殆んど触れていない。本研究ではこの発展過程を系統的に明らかにする。また従来の農家住宅研究は平面計画の研究に偏りがちであったが、本研究では構造（架構）に着目し、その特徴、変遷と発展過程を明らかにする。構造に着目するのは住宅の発展過程を捉える点で平面計画とともにそれ自体欠くべからざる要素である。と同時に一般に平面計画上の変容は歴史的、階層的、地域的に著しいものがあるが、構造面での特徴は比較的安定的であり、型分類上において有力な手段となりうることに着目したからにはかならない。

3 石川県は富山県とともに日本において最も（農家）住宅規模の大きい県である。農家住宅規模の大きさはどの点に現れているのか、また、住宅規模を大きくした要因について、主に住宅平面計画の側面から分析する。

研究の方法と資料

調査対象地域は一応石川県全域を対象としている。

実地調査においては、住宅の建設時期をほぼ藩政期、明治期、大正・昭和前期、戦後期、昭和40年以降の5段階に大別し、現地調査と県・市町村担当者や地元有識者（主に区長）からのヒアリングによってその地域の住宅の典型を最もよく示していると思われる住宅を時代区分

ごとに選択し、プラン採集を行うとともに、住まい方や生活の状況をヒアリング調査した。その中で特に典型と考えられる住宅については再度訪問し、住宅構造図を採取する方法を取った。

調査時期は昭和60年5月から昭和61年10月までに主に4次に分けて実施した。採集プラン数は、後に示すように、加賀地方191、能登地方178、計369プランである。なお、昨年度報告でも触れたように、富山県氷見地方は能登型と同一系統と見なされるため本報告の中に入れていない。

石川県における農家住宅の型分類

石川県は旧藩領域としては全県が加賀藩に属し、大きくは加賀と能登の国に分けられる。さらにその農家住宅は前述の「石川県の民家」によると加賀Ⅰ型、Ⅱ型、能登Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型に分類される。

このうち、能登Ⅰ型、Ⅱ型は、我々の研究結果では同一系統における発展段階の相違を示すにすぎないと考えられたので、その分布域の名称を用い、口能登Ⅰ型、Ⅱ型とし、「石川県の民家」でいうところの能登Ⅲ型は奥能登型としている。

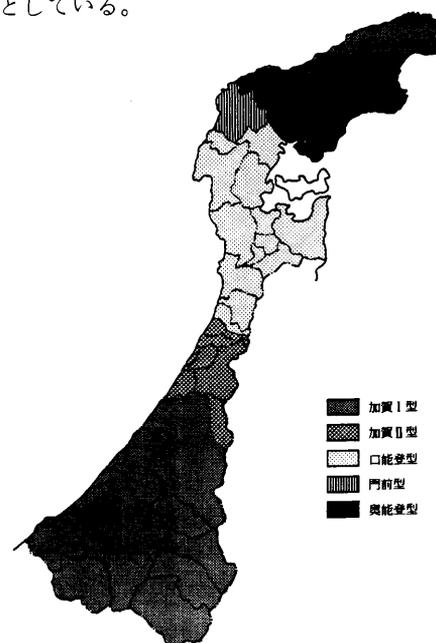


図-1 石川県における農家住宅の型別分布図

1 加賀型住宅

1. 加賀型住宅の分布状況と加賀Ⅰ型住宅の間取り

図-1は石川県における農家住宅の分布状況を示している。

加賀Ⅰ型住宅は金沢市以南の加賀地方全域に分布しており、手取川沿いの白山麓にまで及んでいる。一方加賀Ⅱ型住宅は能登と加賀の旧国境地帯である河北潟の高松町、宇ノ気町及び津幡町の北部に分布しており、その北限は羽咋郡の押水町、志雄町あたりにあると思われるが、これらの地域では（少なくとも現在では）両型が混在しており、今回の調査では境界域を確定することはできなかった。

図-2は、加賀Ⅰ型住宅のモデルプランを示したものである。間取りは、表の土間部分と中央の広間部分を梁間いっぱいにとり、奥に座敷と寝室を設ける妻入型の前ドマ広間三ツ間取りである。大きな農家住宅になると広間の奥に部屋を4室設ける例も多く、むしろこの4室型の方が典型といえよう。

この加賀Ⅰ型は滋賀県湖北地方から分布する北陸地方独特の妻入り前ドマ型住宅の北限にあたる。

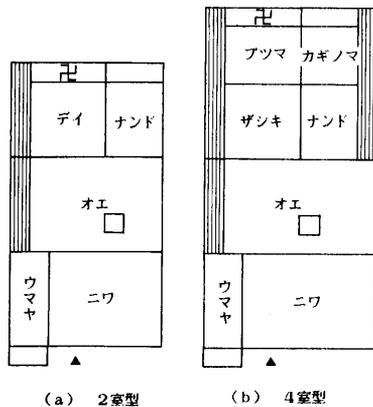


図-2 加賀Ⅰ型モデルプラン

「ゲンカン」から入った所は「ニワ」と呼ばれて農作業空間として使用される他に、隅には「ナガシ」が設けられており炊事空間にもなっている。ニワの奥は「オエ」と呼ばれる広間で、農作業のほか、イロリでの煮炊き、食事及び団樂を行う場所であると共に日常的な接客もここで行なわれる。また「オエ」の側面に「シモネドコ」と称する4畳程度の小部屋を底下屋で設け、老人あるいは若夫婦の寝室にあてることもある。イロリの右手は特に「タナマエ」と呼ばれ、食事の準備を行なう空間である。2室型の場合、仏壇の置かれている部屋は「デイ」と呼ばれる主として接客用の部屋で、隣の「ナンド」は「ネドコ」とも呼ばれる家族の寝室である。しかし行事の際にはナンドはデイやオエとともに間仕切が取り払われる。

4室型の場合、仏壇のある部屋は「ブツマ」と呼ばれ、極めて格式のある部屋である。その隣の部屋は「カギノマ（鍵の間）」「カゲノマ」と呼ばれ、床の間や書院がしつらえた接客空間であり、仏事の際は僧侶の控えの間として使用される。ブツマの下手の部屋は「ザシキ」「クチノマ」と呼ばれ、行事の際にはブツマ等と併わせて接客用に用いるが、日常は特別の用途をもたないようである。「ナンド」は2室型同様家族の就寝場所であるが、行事の際も開放して使用することはなく、完全な私的空間として確立されている。このように、平面構成上は前々回報告した福井県における越前Ⅱ型、Ⅲ型と同じタイプに属する。特に越前Ⅲ型とは後にも示すように構造上からもほぼ同一の型とみなすことができる。

2. 加賀Ⅰ型住宅の構造形式と発展過程

加賀Ⅰ型の分布域である白峰村や尾口村の山中にはかって「根葺き小屋」と呼ばれる股建ての出作り小屋が数多く見られた。根葺き小屋は、柱がなく地面に直接茅葺の合掌屋根を置いたような外観と架構を示す原始的住宅である。その間取りは土間1室のみの単室住居で、中央にイロリが切られている。奥が就寝空間、イロリ周辺が炊事・食事空間となっており、これに作業空間であるニワが前面に付加されている。

本論では、このような根葺き小屋を当地方における農家住宅の最も原初的な形態であると仮定し、これを出発点として加賀Ⅰ型住宅が完成するまでの発展過程について考察することにする。

図-3は加賀Ⅰ型住宅の発展過程を模式図にしたものである。

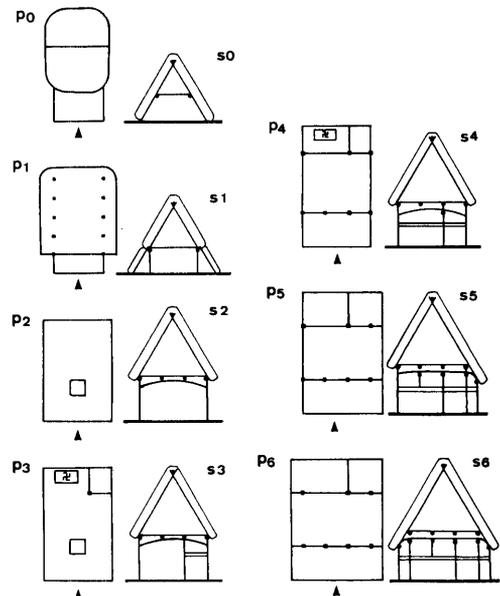


図-3 加賀Ⅰ型発展過程模式図

P₀が根葺き小屋であるが、まず室空間の充実と又首組を補強するため柱が発生する。これがP₁の段階で、長方形に立てた柱に桁行梁、梁行梁を渡して又首を組み、桁より地上に追い又首をたてたものである。この現存例として図-4がある。この住宅は復元によって単室住居であったことが知られる。

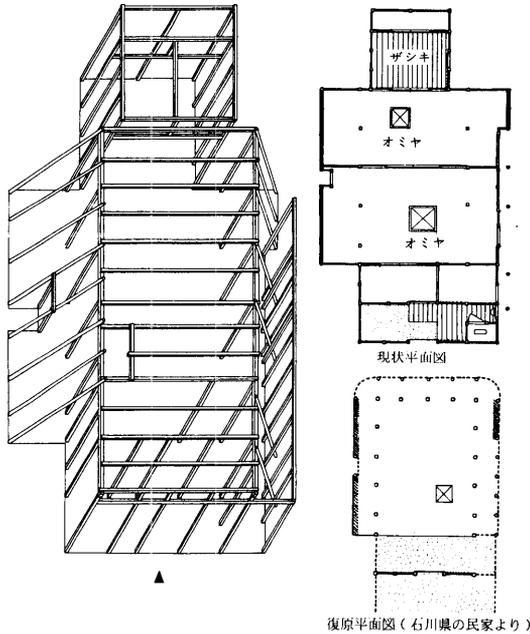


図-4 白峰村大道谷 江戸末期(約130年前)

このような柱と追い又首で囲まれた空間の使い勝手は悪いため、次の段階ではP₂のように梁間を拡張するとともに追い又首を省略するようになる。地元ではこれを「建ち上げ」と呼んでいる。構造的には追い又首が省略された分だけ梁行に柱間を継ぐ太い梁が渡されて補強されることになる。図-5は永久出作りとしては最大級のものであるが、その架構はこの段階のものを示す好例である。

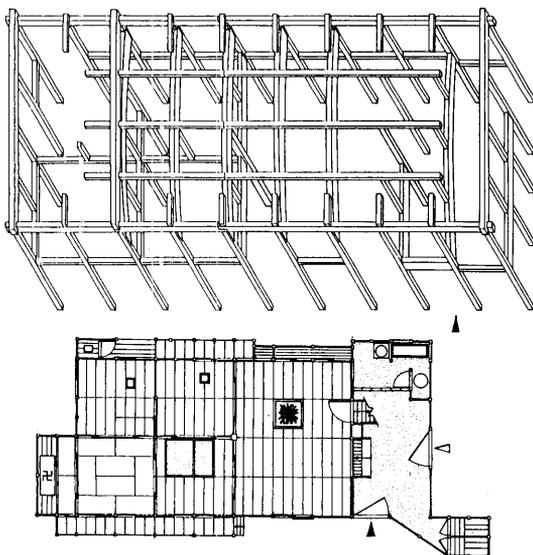


図-5 尾口村桑島 江戸末期(約160年前)

建ち上げ小屋も根葺き同様当初は単室住居であったが、次第に空間分節が始まりP₃の段階のように奥の一隅に米や貴重品をしまい、世帯主夫婦の寝室となる部屋が設けられるようになる(図-6)。

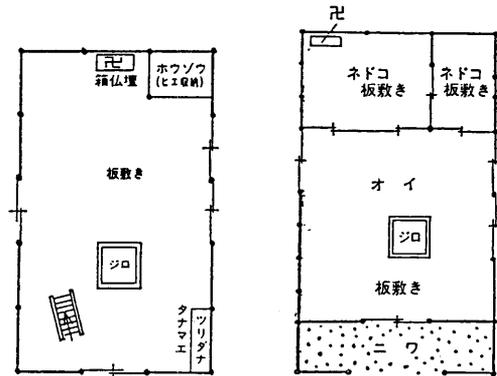


図-6 尾口村東荒谷
(「尾口村史」より引用)

図-7 尾口村東荒谷
(「尾口村史」より引用)

さらにP₄の段階ではその隣に仏壇を備えた空間がデイとして成立する。デイは当初座敷よりも寝室に近いものと思われる(図-7)。構造的にも空間分節にともない差鴨居が用いられ、また桁行梁がオイの上部に配されて+型、卍型架構で覆われるようになる。この段階で加賀I型住宅は成立したといえるのであるが、完成した段階としてはP₅・P₆のように下家を3尺取り込むものが一般的である。片方にのみ下屋を設ける場合(P₅)はネマ側に設けられることが多いようである。下屋架構は、富山県の山間部の農家住宅に見られるようなチョウナ梁を用いることはほとんどまれで、上家桁筋からの繋ぎ梁によって下家桁と緊結している。このP₆の段階以降になると、オイはいわゆる「6本柱」に整理されるが、その点については前報で述べたので重複は避ける。P₅とP₆の実例としてそれぞれ図-8と図-9を挙げる。図-9は既に「6本柱」に整理された段階を示している。

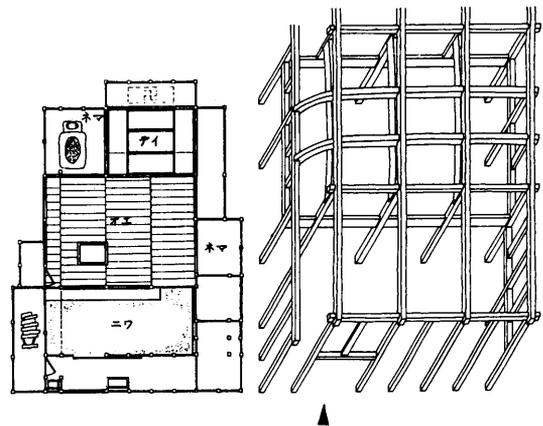


図-8 河内村吹上 江戸末期(約150年前)

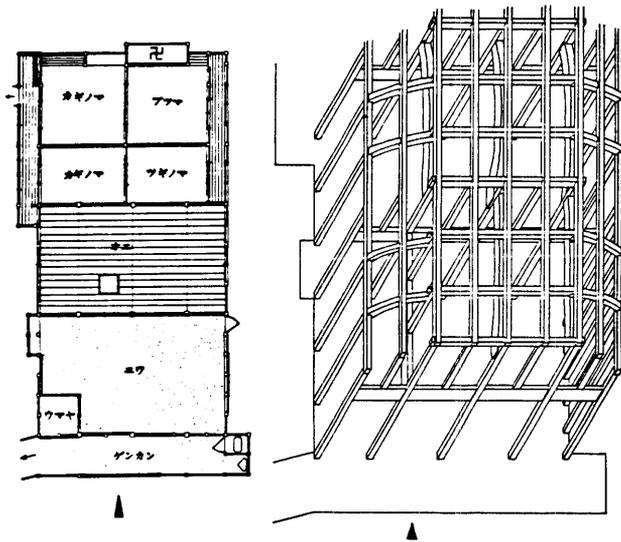


図-9 小松市瀬領 江戸末期(約120年前)

以上根葺き小屋を祖型として加賀Ⅰ型住宅に代表される妻入り前ドマ型住宅の発展過程を措定してきたが、未だ検討課題も多いと思われるので識者の批判を待ちたい。

なお、加賀Ⅰ型の新築住宅は図-10に示すように、ザシキを縦に2室続き間をとるタイプが一般的である。これは前々報の福井県における越前Ⅱ型、Ⅲ型と全く同一の発展形式をとるものである。その特徴については既に前々報において詳述したので、加賀Ⅰ型に関する戦後から現在にいたる変容過程については省略する。

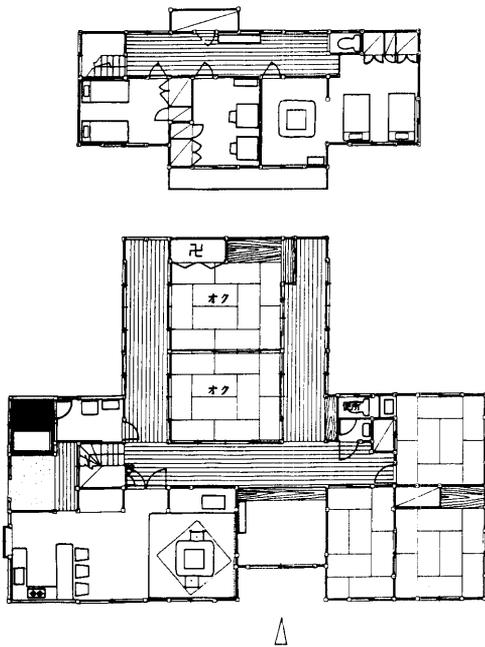


図-10 加賀Ⅰ型新築住宅例

3. 加賀Ⅱ型住宅の間取りと住まい方

加賀Ⅰ型住宅が妻入りであるのに対し、加賀Ⅱ型住宅は平入りである。平面及び構造の基本的構成はⅠ型とほぼ同様であり、単に妻入りのⅠ型が平入りに変わったとみることできる。但し、平入りになることで平面構成上の発展方向は次第にⅠ型とは異なってくるのは当然である。すなわち、この加賀Ⅱ型が分布する地域より北部及び東部でもほとんど平入りとなるが、このⅡ型は外観的には加賀Ⅰ型よりも、むしろ昨年度報告した富山県の広間Ⅱ型やⅢ型と極めて類似している。つまり平入りであるため、奥行(梁行)方向への発達が促され、主屋後部に1間あるいはそれ以上の差し掛け屋根を設けることになり、全体的な屋根形状が2段構成となってくるためである。

図-11は、加賀Ⅱ型住宅のモデルプランを示したものである。間取りは広間型を基本とし、土間と広間の後部を間仕切って小室を設けており、広間の上手に座敷と寢室が設けられている。また大型の農家住宅になるとさらに上手に部屋が2室設けられ、基本的には前ザシキ系の構成をとる。

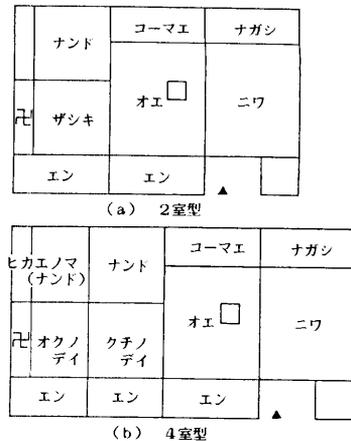


図-11 加賀Ⅱ型モデルプラン

大戸口を入るとすぐの部分は農作業空間としての「ニワ」である。「オエ」は「オイ」あるいは「チャノマ」とも呼ばれ、部屋のほぼ中央部にはイロリが切られており、食事・団欒の場である他、日常的な接客を行なう場である。オエ裏手の「コーマエ」は「カッテ」とも呼ばれ、食事の準備や配膳、食器の収納場所として用いられるが、奥行が1間以上になると食事室としての機能を持つようになる。ニワの奥に設けられた「ナガン」は炊事場であり、味噌や漬物を置く所でもある。また通常ニワからオエに上がる時は大戸口付近の開き戸から入り、引き違いの板戸から出入りすることはない。

次に居室部分は、2室型の場合、仏壇の置かれた接客空間である「ザシキ」とその後部の「ナンド」である。4室型の場合、仏壇の置かれる部屋は「オクノデイ」「ブ

ツマ」「ザシキ」等様々に呼ばれており、その下手の「クチノデイ」「ナカノマ」ともに行事の際、続き間として用いられる格式性の高い部屋である。ザシキ裏手の部屋は僧侶の控え室にあてられるか、家族の寝室にあてられるかによって呼称は異なり、それぞれ「ヒカエノマ」「ナンド」と呼ばれる。この部屋がナンドになる場合、この下手の「ナンド」とともに寝室は2室あることになる。その他、オエやデイの表側には「エンガワ」「エンバ」と称する縁側が設けられ、その巾が1間近くある場合は現在では勉強部屋等の小室に改造されている例が多い。

4. 加賀II型住宅の構造形式と発展過程

加賀II型住宅における間取りの発展過程は、主に主屋後部に設けられる差掛け屋根の拡張と密接に関連している。

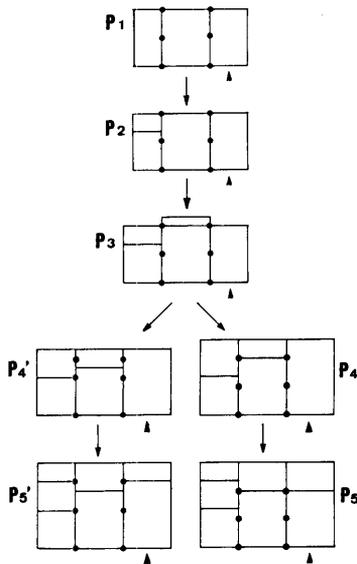


図-12 加賀II型発展過程模式図

その発展過程の模式図を示したのが、図-12である。間取りの発展に関しては基本的には平入り前座敷系に属するため、昨年度報告の富山県における広間I型が広間II型へ移る過程と極めて類似している。P₂ではナンドであった空間がザシキの分化により2室になったものである。P₃の段階ではオエの後部に食器を収納したり食事の準備を行ったりするコマエと呼ばれる空間が発生する。またナガシはこの時点でコマエ右手のドマ奥に確定される。なお、構造的には加賀II型は、後の発展した段階でも上家構造（素屋建て）のままであり、下家構造をとるものは少なく、コマエやナガシ上部は3尺ないし1間の庇で張り出される。したがって、外観的には富山県や能登型と同様、屋根形状は奥行き方向に2段形状となる。図-13はこの段階の住宅例である。

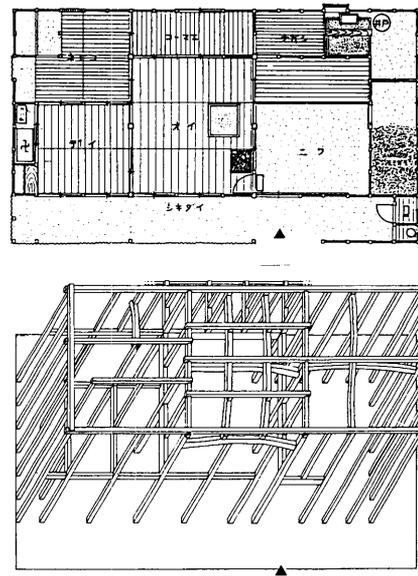


図-13 津幡町向山 明治初期(約110年前)

次の段階として、コマエを部屋として使用できるようにするためさらに後部に拡張がなされるが、P₄の場合は、ナンドが梁行に長くなるため、ここを2室に区切り若夫婦と老夫婦とに使い分けるようになる。

また、発達した段階では、一般に平入りのヒロマ（オエ）は間口が2間半程度が多く、奥行きは2間半ないし3間であり、ヒロマ（オエ）の奥行きが3間を越えることはほとんどない。したがって、無目の差鴨居で間仕切ってコマエを分節させるものが現われる。これが、P₄'であり、富山県の広間I、II型における発展過程と同様の過程をたどる。すなわち、この系統は、次の段階では「6本柱」の原則がくずれ、ヒロマ（オエ）よりもむしろザシキの取り方によって柱の位置が決定されるようになり、不整形6本柱、更に、後には「4本柱」に簡略化されるようになる。

構造的に見ると、P₄では上家桁あるいはその上に立てた束から屋根を葺き下ろすが、P₄'の場合は間仕切として設けられた差鴨居から束を立て、この束に向かって下家桁から登り梁を投げ掛けることによって庇屋根を構成している。更に、P₅、P₅'のように縁側を設けると加賀II型住宅は完成する。P₅及びP₅'の実例として図-14及び図-15を挙げておく。

なお、この加賀II型は、図-1にも示したように分布域も狭く、かつ、妻入りの加賀I型と平入りの能登型に狭まれた接点に位置する地域であるため、特に加賀II型の北部地域では、双方からの影響を強く受け、上記に示してきた基本形を基に、多くのバリエーションが見られる。

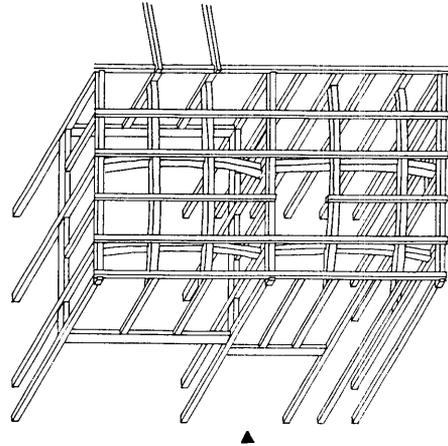
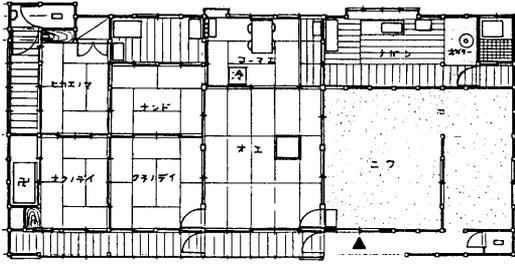


図-14 津幡町舟尾 明治末期(約80年前)

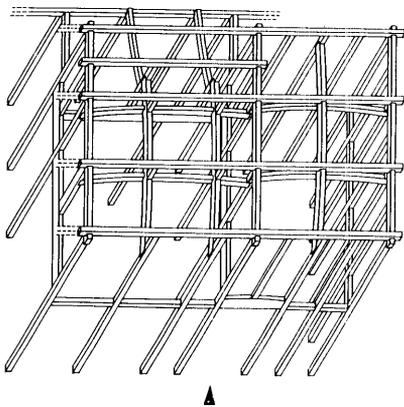
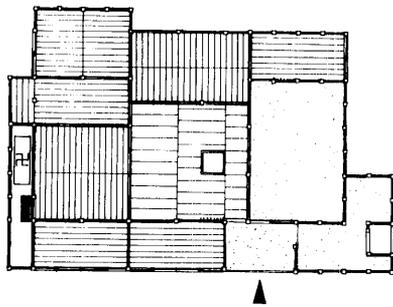


図-15 津幡町木ノ窪 建築年代不明

II 能登型住宅

1. 口能登型住宅の間取り

口能登型住宅のモデルプランは「石川県の民家」によると、図-16、17に示すように「土間に面して表に広間を取り、広間裏にカッチェと寝間を並べ、上手に座敷を加

えた形式」とし、中でもカッチェが土間に張り出したものをI型と定義している。本論では基本的にはこの分類に従っているが、その分布域を考慮して口能登I型、II型と呼称している。

なお、このI、II型は平ドコ(仏壇)であるが、平入り妻ドコの住宅も門前町に分布する。門前町に分布する妻ドコの住宅は、基本的に、I、II型のプランと変わらないが、トコ(仏壇)の位置だけが異なり、当地では「ミツケ床」と呼ばれている。

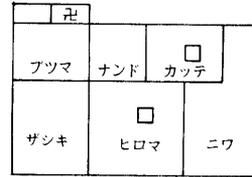


図-16
口能登I型のモデルプラン

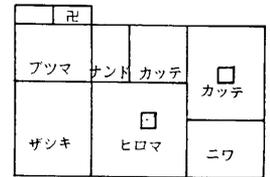


図-17
口能登II型のモデルプラン

2. 口能登型住宅の発展過程

口能登型住宅の発展過程を考えると、最も初期の段階は、図-18、P₁のようにチャノマ(ヒロマ)・ドマよりなる“ひと間住まい”であった。但し、この段階を実証する例は既になく、地域の町村誌に言い伝えとして残されているだけである。

その後、住要求の高まりにつれて、チャノマ(ヒロマ)奥部にナンドさらに上手にはザシキが付加される。この段階が図-18のP₂、P₃である。この段階では、首叉はヒロマ上部のみでナンドは底で出されたと考えられる。これは①後の発展段階においても整形四間取りが強固に維持されるという事実、②18Cに溯ると考えられる民家にはザシキ・ツマ境に柱が残っているものがあるという

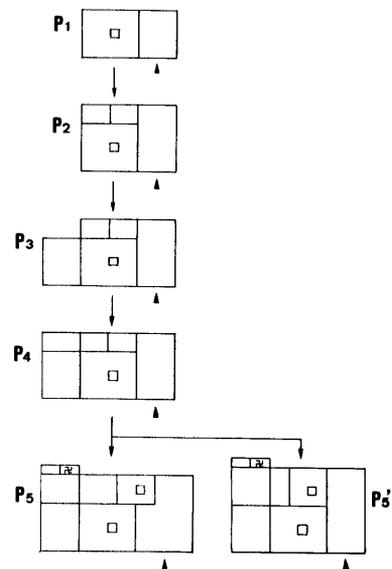


図-18 口能登型発展過程模式図

事実によっている(図-19参照)。現在ブツマとして使用されている部屋の当初の機能は明確ではないが、次第に、ザシキ化されブツマへと変容したと考えられる。

P₄の段階においても当初は、ヒロマ上部筋のみが首叉構造で、その後部の通しは下屋であったと考えられるが、チョウナ梁が使用されるようになり上家からオモテ、ウラ部分を取り込む下屋構造(当地では「真家づくり」という)が発達する。その結果、ヒロマ梁行は2間半が普通となり、ナンド奥行も拡張され、就寝機能と収納機能が分離した。それが、P₅の段階で初めは、ザシキ部分の構法は分節しており、ザシキーブツマ境の柱は存在したが、「ヒラモノ」が普及するにつれて一体的構法をとるようになった。

ニワに関しては、①(図-18, P₅, 図-19, 20)ヒロマーナンド筋の延長線上に柱を建て、梁方向の荷重を負担し、構法上の分節を行なったままカッテ部分の「指し物」を整えてゆく方法であり、これは、I型のプランにおいて見られる構法で、チャノマはこの柱部分までドマに張り出すことになる。

これに対して②(図-18, P₅′, 図-21)ヒロマードマ境界線上に柱をもうけ桁行に梁を渡し、その上部に梁行梁を交差させてドマ部分を一体的な構法へと変化させる方法があり、これはII型において見られる構法である。

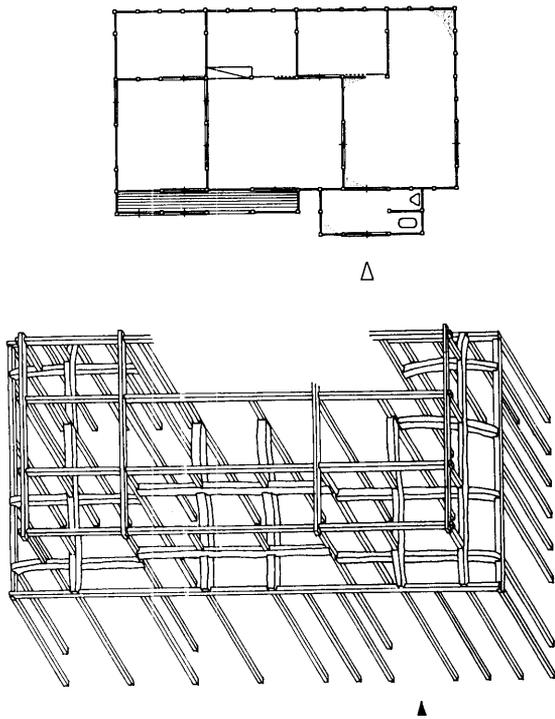


図-19 中島町 座主家 18C前期

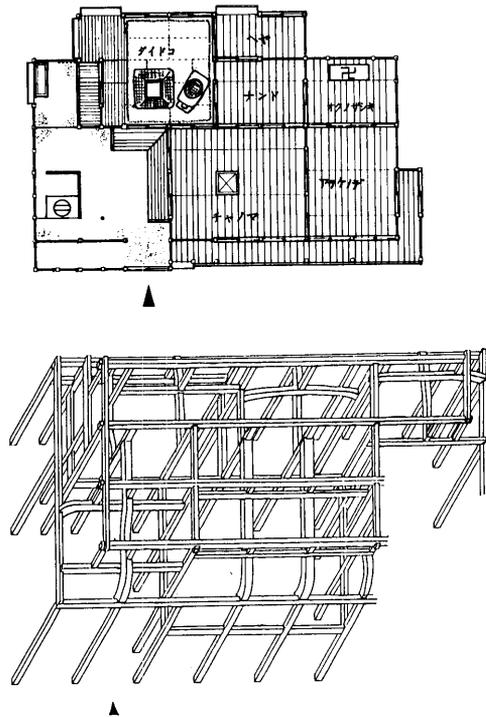


図-20 穴水町 木村家 建築年代不明

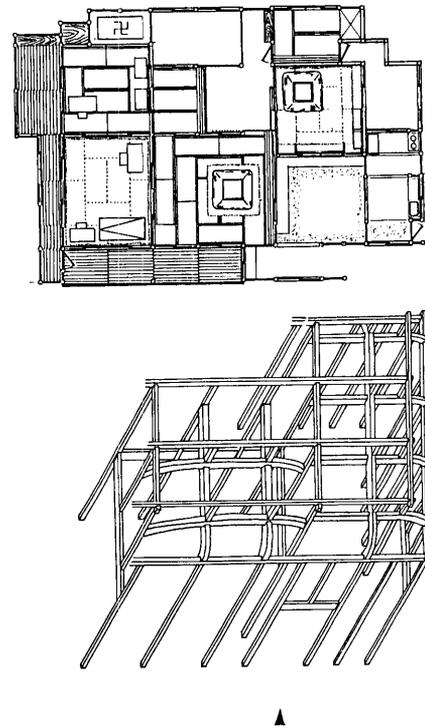


図-21 鳥屋町 100年前建築

3. 奥能登型住宅の間取り

図-22は、奥能登型住宅のモデル・プランである。「石川県の民家」によると、「間取りは、チャノマを中心に、表と上手に座敷を配して鍵座敷を構成し、下手土間側にガイドコロを張り出して、チャノマ裏にリョウノマ、上手座敷裏にナンドを配したプラン」としている。

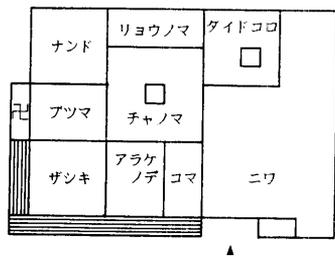


図-22 奥能登型住宅モデルプラン

チャノマ（ヒロマ）はもともと一家の団らんの中心の場であり、接客の場であったが、団らん・炊事機能が、カッテに移行し、現在では、寄合や報恩講などの接客空間としての役割しかもたなくなった。このチャノマに座って仏壇の見える位置にブツマは妻側に配されている。またブツマまたはナンド境に神棚もしつらえてある。しかし、中には、仏壇がこのような位置にはなく、ブツマ・ナンド筋の平側に置くものもある。それを当地では「ナンドカツギ」と呼んでおり、一般に①より古式の慣習を表わすもの②真言宗の流れを汲むものと考えられている。

リョウノマはジョノマとも呼ばれ、主婦の針仕事や配膳室、更にはネマや物置にあてるものもある。チャノマ前部、入口横の小部屋は、コマまたはシモノマ、シモノテと呼ばれ若夫婦の寝室あるいは物置に使用される。しかし間仕切は仮設的なもので、祭時の時には開け放たれ、ザシキと一体となって使用される。

4. 奥能登型住宅の発展過程

図-23は奥能登型住宅の発展過程の模式図である。奥能登型の発展過程を考えると、最も初期の段階は、P₁のような、やはり“ひと間住まい”であった。やがてチャノマ（ヒロマ）の一隅にネマ（ナンド）がとられる段階がP₂である。次の段階で桁行方向への拡大が行なわれ、ザシキ・ナンドが部屋として確立される。これがP₃の段階である。この状態の時に、穀物や稲などをチャノマ（ヒロマ）部分に積み蓄えた。さらに梁行の拡大が行われると、ヒロマ表側が分節される（当地ではこの部分を「アラケノデ」或いは「アラケノデイ」と呼んでいる）。このようにヒロマ前部の部屋は、収穫物等を保管することが目的であった部屋であるので搬入がし易いように、入口横ヒロマ表側に設けられたのである。これが後に、前座敷へと発展し、奥能登の特徴あるプランを生み出したと考えられる。また、この時期と前後して、ニワ部分にオツゲと言われる味噌桶、漬物桶などを収納する部屋ができたと考えられる。この段階がP₄の段階である。このP₄の段階は、ヒロマ筋のみが首叉構造である素屋建てであったが、チョウナ梁により、上下、表奥に1間（ないしは半間）の下屋を取り込む下屋構造が発達しP₅のようなプランへと移行した。

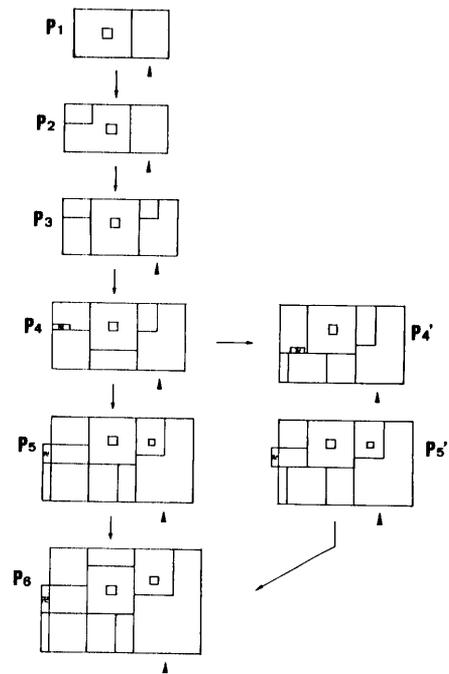


図-23 奥能登型発展模式図

一方、P₄の段階から梁行方向に拡大されるとP_{4'}、P_{5'}のプランが現われる。これは梁行方向が4間以上の場合にのみ現われるもので、ヒロマ筋とくい違いの形でザシキ、アラケノデイが構成される。また、このP₅、P_{5'}の段階では、仏壇の位置は、平ドコ（ナンドカツギ）から妻ドコに変化する。

このようなザシキ空間が成立した背景には真宗の普及により御講が頻繁に行われるようになったことが考えられる。具体的には、①仏壇の大型化に伴ない「ナンドカツギ」ではザシキ背面のただでさえ狭小なナンドが更に狭くなる。②チャノマに着座した参会者は、仏壇、仏と対面できない等の理由により、平側から妻床側へと仏壇が移行し、ブツマが成立した。

また、それはヒロマの機能をも変容させた。ヒロマは本来、日常生活の中心の場であったが、その機能はむしろ、オツギが発達したカッテの方に移り、寄合や報恩講などをとり行なう接客的空間としての意味を強めていったのである。

最後に、ヒロマ後部にリョウノマが成立しザシキ空間は整型化してゆく。これがP₆の段階である。この段階にくるまでに、納屋等が別棟に設けられるようになり、当初のヒロマ前部の機能は不用となり、若夫婦寝室や物置としての性格を強めてきたと考えられる。

以上の例としてP₄～P₅の過渡期のものとして図-24の柳田村（現、江戸村檀風苑）の平家を挙げることにする。建築年代は18C中頃と推定されている。仏壇は、「ナンドカツギ」でまだ床が浅く、ブツマも成立していない。上家2間半で、下家を前に半間、後に1間としてチャノマ上部にチョウナ梁を用いて取り込まれている。「ヒラモ

ノ」も土間境2間に限られている。ヒロマ前部のアラケザシキ上部の構造はまだ梁行梁がなく、P₄の段階の一般的なものと思われる。

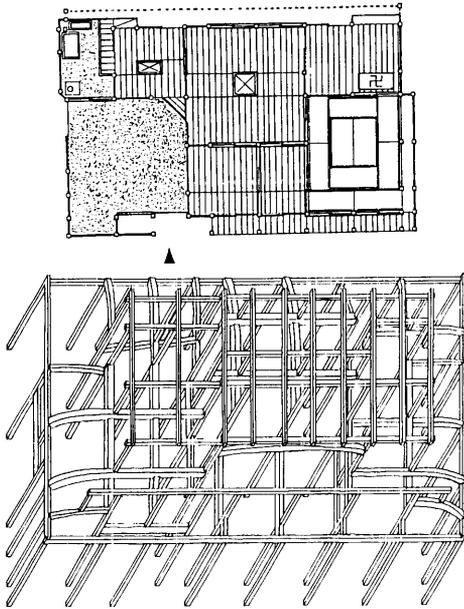


図-24 旧柳田村 旧平家 18C 中頃(江戸村に移築)

次に P₅' の例として図-25の柳田村の上居家を挙げることにする。建築年造は19C 前期頃と推定されている。ナンド巾は、1.5間でトコが半間ある前座敷系の空間構成である。チャノマ上部は十字架構で、カッテ上部は十字架構で、空間的に分節されている。ニワは梁行梁の上に桁行梁がのっており、平家とはほぼ同様である。

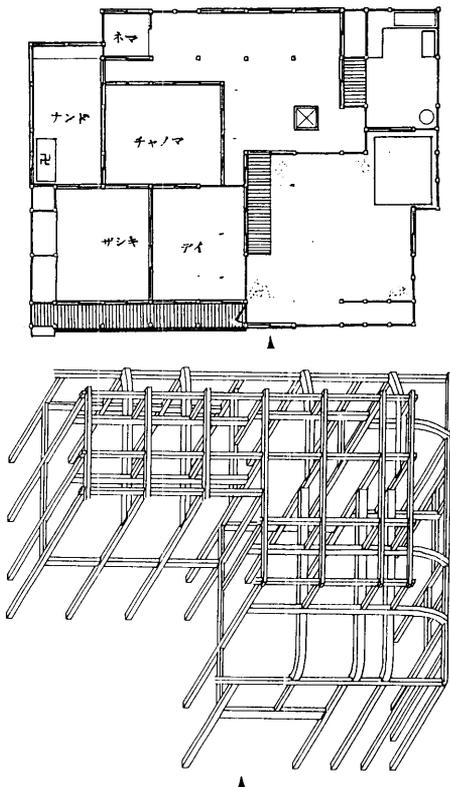


図-25 柳田村 上居家 19C 初

P₆の例としては、図-26の柳田村の向家がある。当家は、200年前に建てられたと伝えられている。チャノマ・廊下は、昭和50年の改築、ナガシ後部の部屋は、昭和35年の増築である。構造はチャノマ上部構造は十字架構で固められ、ザシキ・ブツマ上部の架構とナンドの架構は若干異なっている。

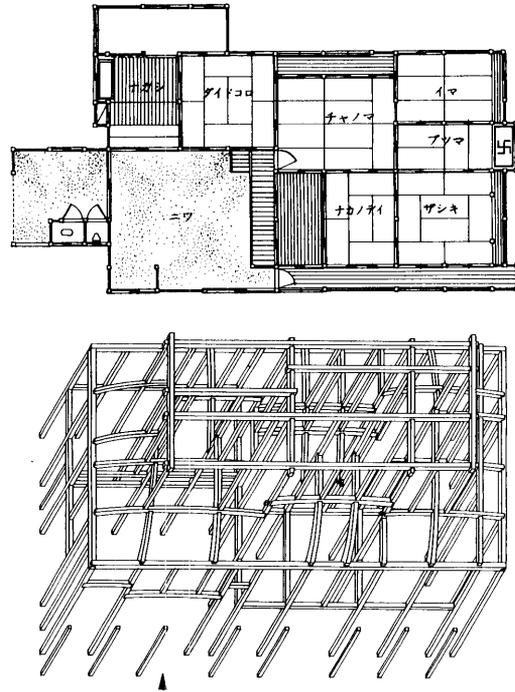


図-26 柳田村 向家 200年前建築

5. 能登型の増改築状況

能登型の中で最も多い増改築は昭和40年頃から盛んになるニワの床上げで、農作業の近代化によってニワが営農作業機能を失ったためである。ニワの増改築後は通路空間確保のための廊下、洗面所、便所、浴室などのユーティリティースペース、子供部屋などの個室、居間、応接間等となっている。

その他の増改築で重要なものに屋根おろしに伴う2階の居室化がある。奥能登型の場合、ダイを若夫婦寝室、物置として使っていたが、戦後急速に2階を設けるようになり、若夫婦寝室、子供部屋、収納スペースが2階へと移り、ダイは格式空間として純化されるようになった。

6. 能登型の新築状況

新築住宅は接客・格式空間と日常生活空間の分離が図られている。まず、口能登型については図-27のように田の字形をとる例が最も多いが、近年では、図-28のように格式空間を鍵座敷の2室で構成し、伝統の間取りを簡略化した例も多くみられる。次に、奥能登型の場合も口能登型同様、伝統の間取りを継承しているプランが多いが、図-29のようにチャノマやダイなどの座敷が簡略

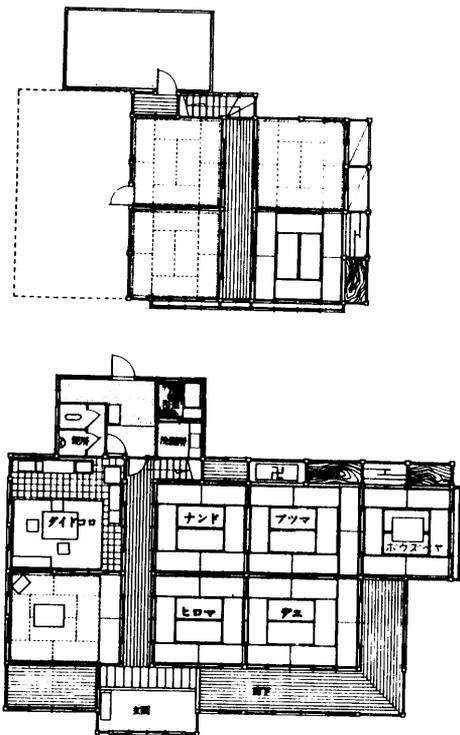


図-27 口能登型の新築住宅例(1)

化された例も多くなっており、最近では伝統的続き間を全く継承していないプランも増加しつつある。このように、奥座敷は減少しているものの、代わって図-28、図-29のように玄関横に洋間の応接間を設ける住宅が多い。

また日常生活空間について、食事室は全てダイニングキッチン化しており、居間はDKに接続してとられる。就寝空間については、老夫婦は伝統的住宅のナンドに相当する部屋を、若夫婦・子供は2階を使用する。

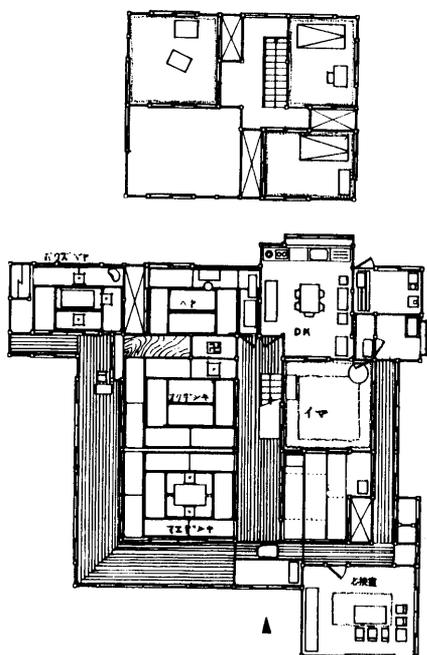


図-28 口能登型の新築住宅例(2)

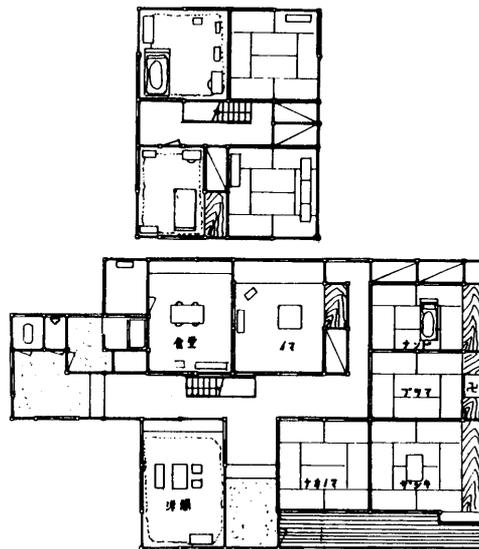


図-29 奥能登型の新築住宅例(1)

7. 住宅規模

表-1は調査対象プランを住宅別建築年代別に分類したもので、戦後を復興期、高度経済成長期、オイルショック以後の安定期に区分している。

表-1 プラン数

	明治以前	明治	大正	昭和1-20	21-35
口能登型	15(0)	20(0)	6(0)	4(0)	1(1)
奥能登型	19(0)	10(0)	3(0)	2(0)	6(3)
合計	34(0)	30(0)	9(0)	6(0)	7(4)
	昭和36-48	49-60	合計		
口能登型	5(4)	14(14)	65(19)		
奥能登型	4(4)	11(10)	55(17)		
合計	9(8)	25(24)	120(36)		

()内は2階に居室をもつプラン数

表-2, 3, 4はそれぞれ、延床面積、1階床面積、2階床面積をみたものである。経年的にみると、住宅規模は拡大している。その要因は両型とも2階床面積の増加によるものであるが、口能登型に関しては1階床面積の増加にもよっている。型別にみると、延床面積は口能登型が169.5m²、奥能登型が164.4m²と口能登型の方が若干大きい。一般的には奥能登型住宅が最も大きいと考えられているのであるが、図-30にも示すように農家比率の相違による見掛け上の現象であって、農家住宅型として見た場合は口能登型の方が大きいことが確認できる。

表-2 延べ床面積 (単位: m²)

	明治以前	明治	大正	昭和1-20	21-35
口能登型	145.0	130.2	125.9	180.8	125.4
奥能登型	136.2	139.4	115.0	117.4	202.3
合計	140.1	133.3	122.3	159.7	191.3
	昭和36-48	49-60	戦前	戦後	平均
口能登型	244.0	243.9	139.1	238.0	169.5
奥能登型	218.6	217.6	134.2	213.4	164.4
合計	232.7	232.3	137.0	225.4	167.2

表-3 1階床面積 (単位: m²)

	明治以前	明治	大正	昭和1-20	21-35
口能登型	145.0	130.2	125.9	180.8	99.8
奥能登型	136.2	139.4	115.0	117.4	133.4
合計	140.1	133.3	122.3	159.7	128.6
	昭和36-48	49-60	戦前	戦後	平均
口能登型	191.0	185.2	139.1	182.4	152.4
奥能登型	142.5	151.2	134.2	144.5	138.1
合計	169.4	170.2	137.0	163.1	145.9

表-4 2階床面積 (単位: m²)

	明治以前	明治	大正	昭和1-20	21-35
口能登型	—	—	—	—	25.6
奥能登型	—	—	—	—	68.9
合計	—	—	—	—	58.1
	昭和36-48	49-60	平均		
口能登型	53.0	58.7	55.8		
奥能登型	76.1	66.4	69.1		
合計	64.6	61.9	62.1		

(ここでいう2階床面積とは、2階の居室に最小限の通路部分を含めた面積である。したがって2階を物置(ツシマなど)としているものは算入していない。)

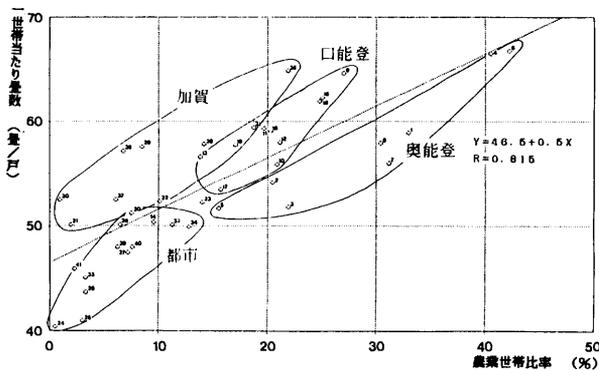


図-30 農業世帯比率×一世帯当たり量数 (石川県:昭和55年)

8. 室構成変化

表-5, 6は調査対象プランを各時期における空間の平均面積とその1階床面積に対する比率をみたものである。中で最も拡大の傾向の強いのは通路空間で、逆に最も減少中の大きいのは「その他」の部分である。「その他」とは現在の住宅ではユーティリティ・スペースや玄関にあたる空間であるが、かつてはドマであった部分である。ここで、通路空間、「その他」、カット・DKをそれぞれ加えると40%程度で推移しており、これらを除く部屋の占める比率、すなわち住面率は60%弱で推移してきたことになる。

次に「ハレ」の空間についてみると、口能登型の場合はヒロマ、ザシキの占める比率は低くなっているが、ブツマの比率は高くなっている。口能登型ではヒカエノマや「ハレ」の空間の中の「その他」、奥能登型では「ハレ」の中のヘヤや「その他」が増加しており、両型とも応接間の比率が大きくなっている。「ハレ」の空間全体では、約40%前後で推移してきたといえる。

以上をまとめると、

1 能登型住宅の増改築で最も多いのは、ニワの床上げ及び屋根おろしに伴う2階の居室化である。新築住宅では、食事室はDK化し、個室は老夫婦のナンド以外は2階にとられる。格式空間については、近年、その構成手法は多様化している。

2 両型とも2階床面積の増化により住宅規模は拡大したが、口能登型は1階床面積の増加も大きい。延床面積は口能登型の方が大きく、2階床面積は奥能登型が大きい。

3 室の構成比変化をみると、通路及び「その他」の空間の変化が著しい。1階床面積に占める「ハレ」空間の比率はほぼ一定した比率で推移してきたが、各部屋の比率は変化してきた。

III 北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究・要約

以上、3年間にわたって北陸地方における農家住宅の変容過程を追跡してきた。その全体についてのまとめは改めて本報告の中で述べるが、本研究の特徴と要点を記すとおよそ以下ようになる。

1 北陸三県における農家住宅について、その藩政期の原初の形態から現代農家住宅に至るまでの発展過程の全容をほぼ定式化することができた。

2 北陸地方の農家住宅は大きくは妻入り前ドマ型と平入り横ドマ型に分けられ、それぞれ特有の発達原理を示すことが明らかにされた。とくに妻入りと平入りではその発展様式は大きく異なる。また同様に、「トコ」の形式、すなわち平ドコか妻ドコかによってもその後の発展様式は大きく異なる。

3 北陸3県の農家住宅型は複雑に分布し、さらにその平面形式上の発展様式も複雑であるが、構法の原理は比較的安定的に推移してきており、構法に着目することによって農家住宅の型分類は容易に解明しうることが明らかになった。この構法への着目が本研究の一つの特色でもある。

4 構法上の制約と平面形式上の発達法則は密接に関連している。

一般に、サス構造の時期においては、梁行よりも桁行の拡大が容易であるため、まず、この方向に空間は拡張されるが、この主屋の拡張部分は「ザシキ」空間に充てられる。農家住宅における住要求の発展は、まず「ザシキ」にあったことと、その格式上「ザシキ」は「主屋」に位置しなければならなかったことによる。

一方、梁行方向への発展は構法的には下屋庇によって行なわれ、この部分は日常生活空間に充てられる。

5 従って、妻入り前ドマ型ではドマの左右に「ツノヤ」

表-5 口能登型における1階室規模と構成比

	明治以前	明治	大正	昭和1-20	21-35	36-48	49-60	
延べ床面積	145.0	130.2	125.9	180.8	125.4	244.0	243.9	
1階床面積	145.0	130.2	125.9	180.8	99.8	191.0	185.2	
2階床面積	—	—	—	—	25.6	53.0	58.7	
ハ	ヒロマ	22.3 (15.4)	19.6 (15.1)	15.1 (12.0)	20.6 (11.4)	12.3 (12.3)	18.2 (9.5)	9.5 (5.1)
	ザシキ	24.0 (16.6)	24.0 (18.4)	21.0 (16.7)	26.5 (14.7)	12.4 (12.4)	18.3 (9.6)	15.1 (8.2)
	ブツマ	10.8 (7.5)	10.1 (7.8)	8.1 (6.4)	10.1 (5.6)	12.4 (12.4)	15.0 (7.9)	14.5 (7.8)
	応接間						2.5 (1.3)	6.3 (3.4)
	客間							
	床	4.0 (2.8)	3.8 (2.9)	5.3 (4.2)	7.0 (3.9)	3.1 (3.1)	6.4 (3.4)	7.4 (4.0)
	仏壇							
	ヒカエノマ	1.7 (4.3)	9.5 (7.3)	14.2 (11.3)	22.9 (12.8)		17.0 (8.9)	21.9 (11.8)
	その他							
	ケ	カッテ	13.5 (9.3)	10.7 (8.2)	15.4 (13.2)	15.4 (8.5)	13.2 (13.2)	12.1 (6.3)
D K								
居間					8.1 (4.5)		16.4 (8.6)	13.8 (7.5)
ナンド		15.1 (10.4)	11.9 (9.4)	8.4 (6.7)	13.5 (7.5)	20.9 (20.9)	25.4 (13.3)	12.7 (6.9)
ヘ	ヤ	1.1 (0.8)	1.2 (0.7)	3.6 (2.8)	11.8 (6.5)	2.3 (2.3)	0.6 (0.3)	1.2 (0.6)
	その他							
通路	7.4 (5.1)	5.3 (4.1)	3.2 (2.5)	7.7 (4.3)	18.6 (18.6)	44.1 (23.1)	53.1 (28.7)	
その他	40.6 (28.0)	34.1 (26.2)	31.6 (25.1)	37.2 (20.6)	4.6 (4.6)	15.3 (8.0)	10.5 (5.7)	
ハレの空間	62.8 (46.6)	67.0 (51.5)	63.7 (50.6)	87.1 (48.4)	40.2 (40.2)	77.4 (40.6)	74.7 (40.3)	

上段：規模（㎡），下段：構成比（％）

としてT字型に張り出す独特の形式を生み出す一方、平入り横ドマ型では、主屋後部に庇、あるいはその発展形態としての「オロシ」と呼ばれる独特の構法が発達する。この部分はいずれも日常生活空間に充てられる。

6 住空間の拡大は基本的には生活水準（経済水準）の向上を背景としているが、構法の発展が住空間の発展を容易ならしめ、さらに発展させるという側面をもっている。

具体的には、藩政期における上家構造から下家構造への発達、および明治から大正期にかけてのサス構造から和小屋への転換は住宅の外観および平面形式上の自由度を飛躍的に拡張した。

7 農家住宅における住空間の拡張は、「ザシキ」等を中心とする「ハレ」の空間を中心に展開してきた。一方、昭和35年以降にはじまる現代農家住宅においては、営農作業が主屋から分離されたことにより、かつての営農作業空間である「ドマ」が改築され、代って「DK」および居間として、日常生活空間の充実がはかられている。

8 現代新築農家住宅では、営農作業空間であった「ドマ」は姿を消す一方、日常生活空間と「ザシキ」等の接客格式空間の分離は完全に行なわれている。また現代農家住宅における平面構成上の特徴として、かつての四ツ間部分のうちザシキ2室が温存、継承されてザシキ2室

表-6 奥能登型における1階室規模と構成比

	明治以前	明治	大正	昭和1-20	21-35	36-48	49-60	
延べ床面積	136.2	139.4	115.0	117.4	202.3	218.6	217.6	
1階床面積	136.2	139.4	115.0	117.4	133.4	142.5	151.2	
2階床面積	—	—	—	—	68.9	76.1	66.4	
ハ	チャノマ	20.1 (14.8)	17.9 (12.8)	23.6 (20.5)	9.6 (8.1)	14.5 (10.9)	5.4 (3.8)	10.1 (6.7)
	ザシキ	12.8 (9.4)	12.9 (9.3)	13.4 (11.7)	10.8 (9.2)	12.4 (9.3)	11.6 (8.1)	12.1 (8.0)
	デイ	15.1 (11.1)	15.8 (11.3)	18.6 (16.2)	13.9 (11.8)	13.4 (10.0)	8.5 (6.0)	8.0 (5.3)
	ブツマ	0.8 (0.6)	1.5 (1.1)	2.3 (2.0)	3.1 (2.6)	3.9 (3.0)	4.6 (3.2)	5.4 (3.6)
	応接間							
	客間				7.7 (6.6)	1.5 (1.2)	8.5 (6.0)	4.3 (2.8)
	床	4.6 (3.4)	5.1 (3.7)	5.2 (4.5)	3.1 (2.6)	4.9 (3.8)	5.0 (3.5)	6.0 (4.0)
	仏壇							
	ヘ	1.5 (1.1)	0.7 (0.5)		1.2 (1.0)	3.0 (2.3)	9.7 (6.8)	13.7 (9.1)
	その他							
ケ	ダイコ	13.2 (9.7)	18.9 (13.6)	13.2 (11.5)	6.2 (5.3)	16.5 (12.7)	15.5 (10.9)	18.2 (12.0)
	D K							
	居間				7.7 (6.6)	3.6 (2.8)	11.6 (8.1)	15.3 (10.7)
	ナンド	12.1 (8.9)	11.1 (8.0)	7.4 (6.4)	11.6 (9.9)	14.9 (11.5)	14.9 (10.5)	12.6 (8.3)
ヘ	ヤ	4.8 (3.5)	7.9 (5.7)			4.4 (3.4)	0.6 (0.4)	1.2 (0.9)
	リョウノマ							
その他								
通路	7.6 (5.6)	7.4 (5.3)	8.3 (7.2)	8.1 (6.9)	9.3 (7.1)	35.8 (25.1)	35.0 (23.1)	
その他	43.6 (32.0)	40.2 (28.8)	23.0 (20.0)	35.2 (30.0)	31.1 (23.9)	10.8 (7.6)	9.1 (6.0)	
ハレの空間	54.9 (40.3)	53.9 (38.7)	63.1 (54.9)	49.4 (42.1)	53.6 (40.2)	53.3 (37.4)	59.6 (39.4)	

上段：規模（㎡），下段：構成比（％）

の「続き間」となることである。この続き間はタテ型とヨコ型があるが、それはその地域のかつての構成原理による。

9 日本において最も農家住宅規模の大きい北陸地方においても、平均値として農家住宅規模はますます大きくなっている。その要因の一つは依然として接客格式空間、すなわち「ハレ」の空間要求にあり、続き間および応接間（洋間）が必要されている。

10 複雑な型分布を示し、かつ変容の著しい農家住宅においても、新しい現代農家住宅の構成原理はほぼ確立してきている。外観的には2階建入母屋を主屋として多くの小屋根を持つハツ屋根形式が支配的であるが、その平面計画上においては、その地域の伝統様式を色濃く反映しつつ、変容、発展してきていることが示される。

<研究組織>

主査	玉置伸悟	福井大学教授
委員	金木 健	石川高専助教授
	増田達男	金沢工業大学講師
	北川 浩	アーバンプランニング研究所
	奥田 徹	福井大学院生
	樋口 裕	〃
	熊田康也	〃